

大規模災害を経験したことのない地域における 事前災害伝承による災害文化の醸成

生田 英輔

■活動内容

本活動は、大規模災害の直接的な経験を持たない「未災地」において、いかにして実効性のある防災意識を根付かせるかという喫緊の課題に対し、「事前災害伝承」という新たな手法を提示するものである。従来の防災教育は、被災地の教訓を学ぶ「事後伝承」が主軸であった。しかし、深刻な被害が想定される地域では、被災経験を有しない住民が当事者意識を維持することは極めて困難である。本活動では、現在の地域の価値を再発見し、それを未来へ語り継ぐプロセスを防災の基盤に据え、大阪市内の一地域（小学校区）の「災害文化」醸成を目指した。

■コンセプト・ねらい

対象地域の新東三国地域は、南海トラフ地震による甚大な被害が確実視されている。しかし、大阪府内における自然災害伝承碑はわずか19基に留まっており、他府県と比較しても自然災害の記憶を物理的・文化的に継承する基盤が脆弱である。本活動の意義は、「失われてからその尊さに気づく」のではなく、今ここにある「大切な景色や思い出」をあらかじめ定義し、記録する「事前災害伝承」を導入した点にある。これにより、地域住民が自らのまちに対して抱く深い愛着（シビックプライド）を、災害発生時の「このまちと命を守りたい」という自発的な防災行動へと転換させる枠組みを構築した。

この概念を具現化するため、学校、地域、大学、行政が一体となった多層的な連携体制を構築し、次項に示す体系的なプロセスを通じて活動を展開した。

■活動実績

1. 事例講演会：東日本大震災の語り部による「いのちを守る」教訓の伝承

本活動のプロセスにおいて、活動に参加する児童たちの意識に決定的な変容をもたらし、活動を推進させる契機となったのが、2025年10月27日に実施された東日本大震災の語り部による講演会である。

防災知識を単なる情報の蓄積に留めず、生命を守るための「行動規範」へと昇華させるためには、感情に働きかける当事者の語りが不可欠である。本活動では、宮城県石巻市出身で、東日本大震災で被災した高橋輝良々氏を招聘した。震災発生時、小学1年生だった高橋氏は、母校の門脇小学校が津波と火災で全焼するという壮絶な光景を目の当たりにした。彼女の活動の根幹には、津波で亡くなった親友との「一緒に小学校の先生になろう」という約束がある。震災から1ヶ月後、がれきの中から発見された親友の名前入りの一本の「鉛筆」を、彼女は「約束を忘れないで」というメッセージとして受け止めた。宮城教育大学在学中から語り部として活動を続け、2025年に教員採用試験に合格。2026年4月からは、亡き親友との約束を果たし、宮城県の小学校教諭として教壇に立っている。

子どもたちへ提示された4つの行動指針 講演を通じ、高橋氏は以下のメッセージを実感を込めて伝達した。

- 1) 「逃げる」ことへの迷いの打破：何をおいても高い場所へ逃げるという判断の徹底。
- 2) 正常性バイアスの打破：「自分だけは大丈夫」という心の隙を自覚すること。
- 3) 避難の連鎖：自分がまず逃げる姿を見せることで、周囲の避難を誘発する重要性。
- 4) 日常の尊厳：「明日また友達に会える」という日常がいかに奇跡的であるかの理解。

この講演は、児童たちに「今ある景色の尊さ」を強く印象付けた。この感性の萌芽が、次項で述べる各学年の具体的な実践活動へと接続されていった。

2. 学年別実践活動：地域愛着と防災意識の統合

講演会で得られた気づきを具体的なアウトプットへと繋げるため、新東三国小学校では学年に応じた重層的な活動を展開した。

- 1) 4年生：防災資源のフィールドワーク（ハード面の理解）：11月17日、語り部授業の直後、地域の消防ポンプ庫や校内の備蓄倉庫を巡る探索を実施した。日常の風景の中に埋め込まれた防災機能を自らの目で確認することで、地域の守りの仕組みを物理的・客観的に理解する基礎を固めた。
 - 2) 5年生：「新東三国の大切な場所」の記録（ソフト面の継承）：冬休みの宿題として、児童自身の好きな場所と、保護者や祖父母の思い出の場所をエピソードと共に記録した。特筆すべきは、「家族でまちを歩き、対話する」プロセスを評価の核心に据えた点である。この活動は、学校教育の枠組みを越えて「家庭」を防災教育の場へと変容させた。多世代の視点が交差することで、地域の歴史や魅力が再発見され、多世代間コミュニケーションを通じた強力な社会関係資本の構築に寄与した。
 - 3) 6年生：下級生への意識伝達と価値の可視化（リーダーシップの体现）：6年生は語り部授業には参加しなかったものの、4年・5年時からの継続的な防災学習で培った「学習キャリア」を基盤に活動した。彼らは「自分よりも小さな子どもたちの命、そして自分たちの自慢のまちを守る」という目的を掲げ、学習成果をデジタル紙芝居のクイズ形式で可視化し下級生へ伝達した。これは、高橋氏が提唱した「避難の連鎖」を知識の伝承という形で体现するものであり、地域リーダーとしての自覚を促す高度な教育実践となった。
- これらの分散された活動成果は、「デジタルアーカイブ」という形で統合され、地域の共有財産として永続化される。

■成果・効果

プロジェクトの完遂には、教育現場、地域コミュニティ、専門機関の相互作用が不可欠である。各フェーズの活動を、単なるイベントとしてではなく、目的達成のためのステップとして配置することで、持続可能な防災モデルを構築した。

本活動を通じて、子どもたちは地域の良さを再発見し、そこに住む人々の想いや歴史を我が事として意識することができた。「自分たちのまち」を愛し、守りたいと願う動機付けが、マニュアルや訓練を実践するための基盤となる。「事前災害伝承」によって育まれたこの災害文化は、新東三国地域の継続的な地域防災活動の深化に繋がり、他地域にも展開可能な成果が得られた。

■今後の展開

本活動の最終目標は、一過性の教育活動を、地域のレジリエンス（回復力）を高めるための地域の資産へと転換することにある。

デジタルアーカイブの意義：新東三国地域活動協議会および大阪公立大学と協力体制の下で構築される「新東三国のみんなの大切な思い出デジタルアーカイブ（仮称）」は、単なる思い出の集積ではなく、WEB公開やデジタル紙芝居として構造化されたこのデータ群は、将来の災害発生時において、以下の二つの重要な機能を果たす。第一に、被災時における住民の「心の拠り所」となること。第二に、復興プロセスにおいて「どのようなまちを取り戻すべきか」を示す「復興の指針（アイデンティティの継承）」となることである。

本活動の成果を一時的なものに留めず、2026年度（令和8年度）も継続的な活動として定着させる。具体的には、2026年5月に開催される地域総会での報告を経て、翌6月には「2026年度 継続計画検討会議」を実施予定である。これにより、地域住民自らが主体となってアーカイブを更新し、次世代へ「事前災害伝承」を紡ぎ続ける体制を確固たるものにする。

以下に、2025 年 4 月から 2026 年 3 月末までの活動プロセスを構造化して示す。

活動期間	活動内容	目的・期待される効果
2025 年 4 月～6 月末	関係機関との体制構築および既存防災活動の整理	淀川区役所、地域活動協議会等との連携強化。共通ビジョンの共有を図り、地域における災害伝承の「社会的基盤」を構築する。
2025 年 10 月 27 日	事例講演会：語り部による意識変容の喚起	東日本大震災の語り部（高橋輝良々氏）を招聘。当事者の声を聴くことで、抽象的なリスクを「自分事」として捉え直す「動機付け」を行う。
2025 年 11 月 17 日	4 年生：防災資源のフィールドワーク	地域の防災機能を可視化し、日常の風景を「守りの仕組み」として再定義することで、防災への客観的理解の基礎を構築する。
2025 年 11 月	6 年生：下級生への意識伝達と価値の可視化	既習の知識を「デジタル紙芝居」として再構成し下級生へ伝達することで知識の定着を図るとともに、地域リーダーとしての自覚と責任感を醸成する。
2025 年 12 月～1 月初旬	5 年生・冬休みの宿題：家族で取り組む「まち歩き」	家族との対話を通じた地域資源の再発見。多世代間のリスクコミュニケーションを誘発し、「地域愛着（Civic Pride）」を深化させる。
2026 年 1 月～3 月末	デジタルアーカイブ構築	収集データを WEB やデジタル紙芝居へ集約。成果を地域全体へ還元し、知識の定着と伝承活動の「永続化」を実現する。

活動の写真は以下の通り。

	
2025. 10. 27 語り部授業	2025. 10. 27 語り部授業
	
4 年生：防災資源のフィールドワーク (2025. 11. 17)	4 年生：防災資源のフィールドワーク (2025. 11. 17)



5 年生：「新東三国の大切な場所」の記録
(2025. 12～2026. 1)



5 年生：「新東三国の大切な場所」の記録
(2025. 12～2026. 1)



6 年生：下級生への意識伝達と価値の可視化

事前災害伝承:デジタルアーカイブで「守りたい風景」を未来へつなぐ

- 思い出の変換：地域の何気ない思い出や風景を、災害時に命を守るための「判断の基準」へとアップデートする。
- 日常への定着：防災を「特別なこと」から、挨拶を交わすような「日常」の暮らしの中へと溶け込ませる。



ハード面の理解:デジタルアーカイブで家族と共有する「まちの防災資源」

いざという時に使える資源を、デジタルアーカイブで日常会話として家族に伝えていく。



ソフト面の継承:地域の歴史と愛着をWebアーカイブで大人たちへ届ける まちの歴史を知ることが、まちの守り方を知ること。デジタルアーカイブで世代を超えた地域のつながりを創っていく。



リーダーシップの体現:Webと紙芝居で下級生へつなぐ「地域の守り方」

4・5年生での学びを統合し、紙芝居やデジタルツールを用いて後輩を導く「リーダー」としての役割を担っていく。

